

実践的教育方法論の今日的意義

瀧口 優

1. はじめに

文部科学省は、教員養成における教職に関する必修科目として、1988年以來「教育方法論」の受講を義務付けている。「今日、学校教育においては、将来の高度情報社会に生きる児童・生徒に必要な資質（情報活用能力）を養い、またコンピュータ等の新しい情報手段の活用により教育効果を高める必要が指摘されている。教員についても、これらを担当する資質能力を含め、教育の方法及び技術についての力量が求められていることを中心にしながら、新たに情報機器及び教材の活用を含むことを明示して、養成教育においてこれらに関する専門教育科目の履修を必修としたものである」（文部省1988）として、「コンピュータ等の新しい情報手段」の活用法を求めている。これは1997年7月の教育職員養成審議会の第一次答申で「授業方法についても、大学の教員のみならず現職教員を含め様々な人材の活用や、学校における実際の授業等の観察、それに代わるビデオ又はインターネット、衛星通信等マルチメディアの積極的活用を図ることなども工夫すべきである」（教育職員養成審議会1997）等、いずれも教育方法論の中心に「情報活用能力」を位置付けていることが特徴である。

しかし教育方法論を「情報活用能力」に収斂させるようなことでいいのだろうか。もっと教育方法本来の意味を取り入れていく必要があるのではないか、そう考えてこの数年取り組んだことを報告したい。とりわけ日本においては「方法論」があまり実践的ではなく、学生に対して具体的に授業方法を示しえないで、テキストの解説を行う場合が多い中で、学生が身体で「方法論」を学んでいくことが重要になっているからである。

2. 教育方法論の「方法」

この科目が設置されたのが1988年であり、コンピュータ時代の入口にあたるころである。まだまだ授業でコンピュータを使うのが珍しい時代でもあった。しかし財界の後押しを受けた文部省（当時）は、その「要請」に応じて積極的に取り入れようとした。やや強引ながらも「新しい情報手段の活用」という点では、その後の教育現場にあたえた積極的な意味がないわけではない。しかし実際の設備やソフト面においては現場任せだったことは否定できない。90年代後半から各学校にコンピュータ教室を設置するようになったが、設置した後のメンテナンスについては自治体任せ、学校任せで国としての責任を示してはいない。教員の保障をせずに教室だけつくる結果として、理科や数学の教員がボランティアで教える事態もうまれている。

その後「情報科」を教科として設置し、コンピュータを専任として教えることが可能となり、教員採用が行なえるようになってきているが、結局「後付」である。

本稿では、こうした「情報機器及び教材の活用」についても触れるが、主として授業形態から「方法」について実践的にまとめ、今後の課題を明らかにしたい。なお、「教育方法論とは何か」という根本的な議論についてはあらためて整理する場をつくりたい。「新しい世紀に生きる世代の教育を担う学校のあるべき姿すなわち新しい学校像を教育方法の上から展望する」として、「(一) 一般教育の多様化、(二) 体験的学習の強調、(三) 児童・生徒の能力別編成の進展、(四) 学校施設のオープン・スペース化、(五) 学習集団の弾力化、(六) 個別学習システムの開発など」（細谷俊夫

1995 p.274)はその糸口になると考えている。

3. 教育方法論と授業

教育方法論という場合に、先の文部省の趣旨によれば、必ずしも教科教育に限定されず、生活指導や進路指導など教育全体に関わっての「教育方法」とも読み取れるが、教育方法について1964年の設立以来研究を重ねてきた教育方法学会の経過を踏まえれば、教育方法が「授業」に力点がおかれてきたことは明らかである。本稿はその流れに沿って、授業における教育方法についての実践的な報告とした。そして授業という場合に、学校教育における「授業」を前提と考えて論をすすめたい。

(1) 教育とは何か、教師とは何か、

授業とは何か

「教育方法論」の授業ではまずはじめに授業の進め方、内容そして評価方法について意見を求める。既にシラバスによって授業内容や評価方法について示してあるが、学生との合意は形成されていない。そこで、なぜ教育方法論という科目が設定されているのか、どんな内容が求められているのかを示した上で授業のすすめかたや内容について要望を聞く。評価については選択肢として、定

期テスト、レポート、あるいは平常点を示し、例年平常点に落ち着く。担当としても学生にとっても最も手間のかかる平常点での評価が希望されることは複雑な思いであるが、高校までのテストによる評価につかれきっている学生の姿が見えてくる。とにかくテストは避けたいという気持ちが伝わってくる。この第1回目の授業によって、毎回何らかの形で学生に書いてもらったり表現してもらったりしなければならぬことを確認する。

週に1回しかないので、1回目から授業の中味に入っていく。最初はまずイメージからである。「教育と聞いてイメージすること」「教師と聞いてイメージすること」「授業と聞いてイメージすること」を書いてもらう。B6の用紙を配り4半分に折ると16のマス目ができる。そこに一つずつ思い浮かんだことを記入してもらう。時間は3分から5分に設定し、終わっていない学生がいても5分で終わりにして、彼らが抱いたイメージを相対化する。基本的には前年度の学生が同じように書いたものを数が多いものから並べて一覧にし、配布する。自分の書いた16のイメージと重なるもの、重ならないものを確認させる。重ならなかったものをいくつか紹介してもらう。以下学生が書いたイメージの上位にあがったものである。

表1 (和光大学 2006年度前期 59名)

①「教育でイメージすること」		②「教師でイメージすること」		③「授業でイメージすること」	
学校	37	授業	21	先生	22
先生	32	知識	18	ノート	21
授業	31	学校	16	黒板	20
生徒	28	信頼	16	教科書	18
勉強	27	生徒	15	生徒	17
子ども	25	やさしい	13	ねむい	17
親	19	教える	10	教室	16
教科書	17	厳しい	10	チョーク	13
教える	14	職員室	10	宿題	12
義務	11	チョーク	10	机	11
教師	10	勉強	10	つまらない	11

この表からどんなことが読み取れるだろうか。小、中、高と12年間の教育を体験してのイメージであるから、学生たちの体に染み付いているイ

メージである。教育方法論の授業ではまずその方法論に関連する「教育」「教師」「授業」について、創造的なイメージを持ちえていない実体をお互い

に認識しあうことを目標としている。もう一つは、このように学生の持っているものを教材とする手法を示すことである。

(2) 理想の授業や教師を求めて

授業の最初にイメージを出し合い、次に「私の出会った授業」「私の出会った教師」を書いてもらう。第1回の授業の終わりに用紙を配布し、次週までの課題として「私の出会った教師」を書いてくるように指示する。そして第2回の授業では、グループを作ってそれぞれが書いてきた教師について読み合う。グループは6人を上限としてつくるが、まず初めは1～6の番号を言ってもらって、それぞれの番号のところに集まってもらう。大学は座席が決まっていないので、仲の良い人間が席を近くする傾向があり、それをできるだけ解体して見知らぬ人間関係を繋げる機会にする。

15分ほど時間をとって、まずグループ内の自己紹介を行い、それぞれが書いたものを時計回りに渡してグループ全員が皆の書いたものを読む。そしてあらかじめ指定しておいたように、各グループから一つを選んでもらい、全体に紹介してもらう。一つひとつ読み上げながら意見を求め、同じような先生がいなかったか、同じような授業がなかったかを聞いてみる。9のグループから推薦されたものを検討すると、「教師」「授業」についての理想や課題が自然と見えてくる。

(3) 授業方法の検討へ

次に「授業で考えなければならない要素」について書いてもらう。前回まで行っていた16分割の方法で書いてもらい、これは書いたものをもとにして一人一つずつ言ってもらって黒板に書いていく。50人で出してもらうと150項目以上の「考えなければならない要素」が出されるが、前年度に出されたものを印刷して配布し、自分の書いたものと比較させる。自分が気がつかなかったことが数多く出されることに驚く。「あきさせない」「大きな声で」「面白い内容」「考えさせること」「環境を整える」「教材研究」「興味を持たせる」「時間配分」「子どもの発言の機会」「生徒とのコミュニケーション」「生徒の気持ち」など等、極めて多岐にわたる。

次に教室での授業をイメージし、今まで出会った授業の形態についていくつか出してもらうと、一斉授業、小集団授業、個人別授業に分かれる。また授業の内容から聞いていくと、講義式授業、発表型授業、参加型授業が出される。参加型授業については学生から出てこないこともあるが、後で確認すると参加型だったのではないかという声もある。

最後に新しいグループを生まれた月別で形成し、そのグループで「一斉授業」「小集団授業」「個別授業」のメリットとデメリットを各グループで相談して書いてもらう。時間は10分とし、リーダーや記録係はグループで決めるように指示する。

表2 授業形態のメリット・デメリット

班	一斉授業		小集団授業		個別授業	
	メリット	デメリット	メリット	デメリット	メリット	デメリット
1	教師が生徒に情報を伝えやすい	先生主体になりがち	発言しやすくお互いに考えを深め合う	脱線しがち	「わからない」に対応できる	先生としか関われない
2	みんな一斉に教えられる	参加している感じがやすい	他人との意見交換が出来る	意見に詰まると終わってしまう	分からないところを詳しく教えられる	他の人の意見に触れにくい
3	色々な考えがあるから面白い	先生の一方通行になりがち	やる気が出て友達ができや	自分にとって良い班なら楽	親近感が生まれ質問がしや	自分や先生の意見だけに固

	い		すい	しく、楽しくない班だと孤立する	すい	執して選択肢が狭くなる
4	一斉にできる	一人一人に目が向けられない	意見を交換しやすい	仲が良くなる となあなあになる	丁寧に教えられる	他者と関わりがもてないので協調性が身につかない
5	色々な授業の形にできる	教師からみると圧迫感があって怖い	先生と生徒がうち解けやすい	馴れ合いになりやすい	聞きにくい質問ができる	逃げ場がなくてきまずい
6	与えられる情報は同じ	目が行き届かない	討論などを通して協調性が芽生える	進行係が必要になる	マイペースでできる	先生を待つ時間が無駄

各グループから出されたメリットとデメリットについてお互いに質問を出し合いながらその妥当性を確認する。まったく的外れなことを書いたグループもあれば、極めて本質的なことを書いているグループもあり、相互の交流を通して学び合うことができる。

(4) 授業方法の体験

一斉授業や小集団授業については、既に今までの授業で紹介していることを伝えつつ、改めて授業を行ってみる。また新しい形としての参加型授業についても一部体験してもらうことにした。

①一斉授業

一斉授業と講義式授業については重なる部分もあり、私自身の英語の授業の一部を通じて、一斉授業のメリットを生かし、デメリットを補うような方法を試みる。

教材は英語の歌で「Amazing Grace」を使う。まずテープで曲を流して曲名か歌手の名前が分かったところで手を上げさせる。メロディーは聞いたことがあるが曲名や歌手名は出てこない（ただし年度によっても反応は違う）。そこでこの曲を聞いたことがあるかどうか尋ねると数人が手をあげる。テレビのコマーシャルやアメリカの大リーグの開式などに歌われていることを確認して、次に歌詞の穴埋めを聞き取りながら行う。一斉ではあっても「先生の一方通行になりがち」というデメリット

トを克服する方法もあることを伝える。

②小集団授業

既に小集団を形成して話し合いなどを行ってきたが、改めて取り組んでみる。まず6つのグループにわけが、あらかじめ1～6までの数字を書いた紙を袋に入れて準備し、1枚ずつ選んでもらう。そして同じ番号の人とグループを形成するようにした。

黒板に①アメリカ合衆国、②ベトナム、③イラク、④フランス、⑤中国、⑥フィリピンと書いて、各グループにどの国について報告したいか選んでもらう。代表が前に出て班の番号をそれぞれの国のところに書いて申告する。

第1回目の小集団授業は、何の準備もなく国を選んでもらって、それぞれの国の特徴を5項目で表現してもらう。模造紙を渡して国の名前と5つの項目、グループの名前等を書いて黒板に貼りだす。時間は15分としている。各グループは、リーダー、記録、説明、質問、回答（2名）の係を配置して発表に臨む。

まったく準備がなくその場の知識で発表し、他のグループから質問係が必ず質問をするので、発表したグループは大変な状態になる。発表そのものも不確かであり、なおかつ出される質問に対してはほとんど対応できない。全てのグループが終わって学生のため息が聞こえてくる。

最後に次週も同じ形式で同じメンバーで行うことを伝え、事前にテーマを選んでもらう。①ベトナム戦争、②イラク戦争、③9.11事件、④イスラエル・パレスチナ問題、⑤アメリカの人種問題、⑥朝鮮戦争、を黒板に書くが、学生からの要望があれば新しいテーマも加える。前年度はアボリジニーが推薦された。各グループは分担して調べるように手配して次週にのぞむ。

第2回目の小集団授業は、事前にテーマが決まっているので、授業の初めからそれぞれが調べてきた内容を交流しながら5つのポイントをまとめていく。同じように15分の話し合いと発表の時間を確保して行うが、前回の発表の様子と格段の違いとなる。発表内容も豊かで、質問に対する回答も的確に答えることができる。

③参加型授業

生徒達が活動に参加しながら自然に学んでいくという参加型授業は、90年代から徐々に学校の授業に取り入れられるようになってきている。教育方法論の授業では「アイデンティティの競売」と「グロ（グローバル）・ビンゴ」を行う。

「アイデンティティの競売」は「スポーツ万能」にはじまって「他者を愛する能力」「あなたを信頼する両親」など28項目の「ほしいもの」があ

り、それを4つずつに区切って、その4つのうちから何を自分は選ぶのか金額を書き込む。そして教室の4つのコーナーに別れて、誰がどのような能力を求めているのか、どれだけ重視しているのかが見えてくる。一番高い数字をつけた人が買ったことになるが、基本は誰がどのような願いを持っているのかを活動を通して理解しあうことである。「グロ・ビンゴ」は身近な人が如何に海外とのつながりを多くもっているのかを確認できる活動である。

4. 教育方法論の授業と学生の反応

最終授業の前に、学生に対して簡単なレポートを書いてもらう。①この授業を通して何か学んだことはありますか、②授業スタイルで一番気になったのはどの形ですか、③4ヶ月の授業を通して一番印象に残っているのはどんなことですか、④「教育方法論」の授業としてもっと充実するためには何が必要ですか、⑤これから教師になるにあたって何か質問しておきたいことがありますか、⑥その他何でも。そして⑤については最後の授業ですべての質問に文書を用意して回答する。以下学生の質問の一部とそれに対する私のコメントである。

表1（和光大学2006年度前期59名）

これから教師になるにあたっての質問	回答
教師も人間なので好き嫌いがあると思うが、もし嫌いな生徒が出てきたら、どのような対応をすれば良いのか？嫌っている態度を取ることは絶対にいけないか、どうすればいいのか？	確かに苦手な生徒は出てきますが、それを嫌いと思ってしまったら必ず自分の態度に出ます。そして生徒もその態度は敏感に感じ取ってしまいます。嫌っているという態度をとることは良くないと思います。むしろ嫌いなタイプの生徒とは出来るだけ時間をとってどこか良い面を見つけ出してそれをほめながら良い関係をつくっていくことがコツです。こちらが良い関係を求めれば、そしてほめていけば必ず生徒も近づいてきます。いつの間にか苦手意識は変わっていくと思います。いずれ試してみてください。
生徒の心をつかむためには、どのようにすればいいのか？	生徒の心をどのようにとらえるかによって「心をつかむ」方法は違ってくると思います。生徒の心を聞いて、それを大切にしながら彼らの成長と一緒に考え、時には叱咤激励することも必要です。まずは心を聞くことからです。
人の前に立つ事に不安があるのですが、こ	その通りだと思います。もちろん得手不得手はありますが、

<p>れは慣れていくのでしょうか</p>	<p>基本的には慣れてしょうね。ただし教材研究をしないで授業に行くと慣れていても不安になりますから、それなりの準備は必要ですね。</p>
<p>まだ教師になろう！とか、なりたい！とか、なるんだ、というのが自分の中でリアルじゃないので、なんとも言えないのですが。生徒たちのニーズを知る方法が知りたい。でもまだ自分はその生徒たちの中の一員であるわけだから…。何か難しいですね</p>	<p>生徒たちのニーズは多面的です。日頃何を考えているのかを引き出すためには学級の集団が何でも話せるような関係にならなければなりません。そのステップとして、授業ノートなどを作成して、授業ごとに何かを書いてもらい、それに対して教員がコメントを書いていく方式、担任であれば学級ノートということになります。授業を通してということであれば、生徒に英語を使って詩や俳句を作らせ、それを交流することでお互いの考えていることが見えてきます。方法はいろいろありますね。</p>
<p>授業をしていて参加できない生徒がいた時、どんな授業をしたら参加できるようになりますか</p>	<p>基本的には授業の内容がわかるということですから、授業に参加しない生徒は授業でやっていることがわからないか、解りすぎていてつまらないか、それともやっている中味が面白くないといううちのどれかでしょうか。そのような生徒がいたら、なぜ授業に参加しないのか聞いてみることも必要です。「つまらない」「わからない」という言葉が返って来れば、どうすれば面白くなり、解るようになるのかのヒントが出てくると思います。</p>
<p>教師になる上で何が一番大切だと思いますか。</p>	<p>他の人にも聞かれましたが、一番といわれると困ってしまいますが、とにかく教師になりたいという気持ちを強く持つことだと思います。それがあれば採用試験に向けても準備しますし、教師になってからの準備もしようと努力します。その気持ちを持つためには教師という職業の素晴らしさを実感することですね。本を読んでもいいですし、ボランティアで小学校や中学校に行って何かをやることも考えられます。</p>
<p>どのようにして生徒と交流を深めていくのか知っておきたいことです。自分からすすんで話しかけていくのか、それとも生徒が話しかけて来るまで待つのか。</p>	<p>結論としては両方の可能性があります。つまり生徒によってはこちらから声をかけないと心を開かない生徒と、向こうから寄って来る生徒です。基本的にはこちらから声をかけて、どんなことを話しても大丈夫と思わせるようにして、自然に生徒が寄って来るようになるのが理想ですね。</p>
<p>先生はいつでも何かを学びながら生きていますか？字がきたなくても先生をやっているのでしょうか？</p>	<p>別に教師に限らずみんな人間は何かを学びながら生きています。私も好奇心が強いのか、学びたいことがたくさんあって時間が足りません。字がきたないということを気にするのであれば、練習して少しでも綺麗に書けるようにすれば良いことで、先生をやっているかどうかにはあまり関係ないと思います。</p>
<p>やる気の無い生徒にも楽しく授業を受けてもらうには、どのような形の授業が一番いいのでしょうか？</p>	<p>授業だけでそうしたやる気のない生徒を変えることは難しいかもしれません。勉強に意欲をなくしている生徒は、「わからない歴10年」などという生徒もいますので、それを授業の時間だけでうまく変えるのは大変です。授業を楽しくやるというのは一つのきっかけで、その授業を通して生徒との距離を縮めて、その上で生徒の分からなさを一緒に解きほぐしていく個別指導が必要ではないかと思っています。</p>

	ます。
黒板（またはホワイトボード）を多く使った方がいいのか、それともプリントを中心にやったほうがいいのか。またビデオなどはその時間中ずっと見た方がいいのか、それともある程度授業をしてからの方がいいのか	それは実際に授業を進める中で確かめることで、今から考えることではないと思います。でもあえて言えば、適度なバランスで行うことがいいのではないかと思います。ビデオなども内容によって全部を見せたほうが良い場合とそうでない場合があります。
授業をするにあたって気をつけなければならないこと、また授業をするにあたって辛いことは何ですか。	基本的には生徒は勉強をわかりたいと思っているということ、そして楽しく学びたいとおもっていることでしょうか。ただ知識を与えるというよりも、知識を自分でどう獲得していくのか、その手助けをするような授業になればと思います。生徒が授業を聞いてくれないこと、授業をしながら生徒がわかってないということが表情に出てくるのが辛いですね。
小・中・高によって、学年によって、授業形式というのは変えるべきなのか？それとも一つのやり方を通すべきなのか？	むしろ教材や教科によってその内容にふさわしい授業形態があると思いますから、学校や学年の違いとはちょっと違うかもしれません。生徒が知識をただ暗記するだけを目標にするならば、一斉授業の中でテストを繰り返し行なうことが効果的ですし、生徒の発言する力をつけたいと思うならばグループや話し合いの時間を多くとる形式を採用することになります。
「生徒と教師」という関わり方は、教育方法論以外の授業でもいろいろと教わってきました。けれども「教師と保護者」との関係についてはあまり知識がありません。むしろ「生徒対教師」の関係よりも「教師対保護者」の関係の方が難しいのではないかと思います	中学生や高校生の保護者というのはだいたい40歳前後です。教師は新任だと20歳前半です。したがって保護者が教師の言うことを素直に聞くにはあまりにも年齢的な違いがあります。ただそれは年とともに変化していきます。40歳ころになると保護者の方から相談にのれるようになります。また20代でも、子どもの事を一緒になって考えようとすれば保護者も心を開いて話してくれますから関係をつくることはできると思います。保護者も子育てでは迷ったり困ったりしています。
教師として生徒にしないと心に決めていることはありますか？	まず第一に暴力は使わないということ、そして解らないのは生徒が悪いという責任転嫁をしないことでしょうか。確かに生徒が授業を聞かなかったり勉強しないと、責任転嫁したくなります。でも生徒の悩みを聞いて授業の工夫をしていくと授業に参加するようになります。つまりこちらの問題でもあります。もちろん1クラス40人という「群れ」ではとても全員を「わかった」と言わせるのは無理がありますから、100%求める必要はないと思っています。でもできるだけ多くしたいと願って授業の準備をします。

5年前にこの授業を始めた当初、「②授業スタイルで一番気になったのはどの形ですか」については圧倒的に「参加型」授業という反応だった。しかし2006年の感想では「小集団授業」が大きく増えてきている。実践的に進めているが故に、

小集団授業の持つ意味が見えてくるのではないだろうか。裏返せば、現在の大学生が参加型のようなお互いの理解を深め合うという授業の前に、小集団によって身近な人間関係をつくる喜びを体験したいというささやかな願いが表れているのでは

ないか、と読み取っている。それだけ高校までの人間関係が希薄になっているともいえる。

だとすれば、教育方法論を実践的に行うことは、教師をめざす学生達が体で教育の意味をつかんでいくことに繋がるのではないかと考えられる。教師をめざす大学生が授業体験においても教師体験においても、実践的に学ばない限り、現場に行っ

て戸惑うばかりであろう。今こそ教育方法や生活指導を実践的に高める機会を増やす必要がある。ささやかな取り組みであるが、こうした要請に応えられるものであれば幸いである。

— 引用・参考資料 —

- 細谷俊夫 1995 方法研究の展望 戦後教育方法
研究を問い直す（日本教育方法学会編）明治図
書
- 教育職員養成審議会・第1次答申 1997 新たな
時代に向けた教員養成の改善方策について
- 文部省 1988 教職に関する科目の趣旨
- 小川哲生 2006 教育方法の理論 教育方法の理
論と実践 明星大学出版部
- 柴田義松 2001 教育課程の変遷 教育の方法と
技術 学文社